日本ゼオン各事業所

総合開発センター

事業所紹介

研究所全景

総合開発センターは、多摩川を隔てて羽田空港の向かい側にあたる川崎地区石油化学コンビナートの一角にあり、当社川崎工場と隣接しています。 主に合成ゴムをはじめとする当社事業を支える各種素材の開発から、加工技術の開発に至るまで、「ひとのまねをしない、ひとのまねのできない」を合言葉に、地球に優しく、革新的・独創的な技術に基づいて世界一の製品を創出し続けることを通じ、社会に貢献することを基本理念に、研究・技術開発を行っています。

また、富山県高岡市のゼオン高岡事業所内においては、液晶テレビ用途や次世代ディスプレイ用の光学フィルム、省エネに貢献する有機 EL 照明用素材、血管や胃腸、胆嚢などの診断と治療に使われるカテーテルなどの医療機器を開発しています。

これら生活に役立つさまざまな材料・部材の開発や、省エネルギーと自然環境に貢献する新製品を創出し、幅広いお客様に提供する事を通じて、「環境に優しく、社会に必要とされるゼオン」であり続けたいと願っています。

同時に、研究活動で生じる廃棄物の分別徹底によるゼロエミッション※の継続やエコキャップ収集活動、近隣企業と合同での道路清掃、インターンシップの継続的な受け入れなど、地域社会の一員としての活動も積極的に行っています。

今後も国内にとどまらず、北米・中国・欧州の研究所・技術サービス拠点と連携した研究開発活動や、海外の大学・企業との共同研究も積極的に進め、世界中のお客様に当社の新製品を届け、地球環境と人類の繁栄に貢献するための研究開発活動を継続していきます。

※ ゼロエミッション
自然界への排出ゼロのシステムを構築する、またはそれを構築するように目指す基本的な考え方

CSR取り組みへのメッセージ

「CSR 基本方針」に則り、研究所員全員が CSR を自覚した研究を行っています。また、コンプライアンスについては、研究活動全般を通じて関連法令を遵守し、事故のない安全で活気に満ちた研究所の実現を目指します。総合開発センターでは、新規研究の開始前に、研究部署の新規研究内容の提案に対して、研究部門・管理部門が一体となって、関係法令遵守、化学物質の安全性、研究者へのばく露防止などの安全配慮を議論・確認し、適正な資源配分を行う「新規実験安全性審査」を行っています。今後もお客様に信頼性・安全性に優れた品質を有する製品を継続的に提供できるような体制で研究開発を行います。

環境安全活動

2012 年度は、「危険に気づくこと。危険に気づき、対話を通して、対策を行う。」を安全方針とし、危険に「気づく」ことに力点をおいた危険予知活動を徹底して実施しました。センター所員の真摯な安全活動により、800 万時間無事故無災害（休業災害ゼロ）を達成することができました。また、研究活動により生じる廃棄物の分別とリサイクルを徹底し、年間を通して埋立処分量をゼロにすることも継続しています。

危険に「気づく」ことを重視した危険予知活動（現場型 4RKY、ヒヤリハット、部署パトロール）、これらの諸活動を有意義なものとするためには、危険に気づきながらも、そのまま作業を続け、事故にいたることなどがないようにしなければなりません。

2012 年度は、安全活動の基本に立ち戻り、全員の「あいさつ」を、まずはじめにお願いしています。「あいさつ」は、対話のきっかけであり、対話は組織の潤滑剤と考えます。「あいさつ」のない組織では、対話も十分にされていないのではと思われます。対話がなければ、せっかく気づいた危険も、そのまま放置、「ほったらかし」にされてしまいかねません。「安全は存在しない。常に存在するのは危険である。」という教えのもと、無事故無災害を達成していきたいと思います。

また、廃棄物のリサイクルを継続し、埋立処分量ゼロを維持していきます。

品質保証活動

ゼオンの研究開発の基本理念である「ひとのまねをしない、ひとのまねのできない」独創的かつ革新的な技術に裏付けられた製品作りが私たちの目標です。この目標を実現するために、開発の全ステージで知財、安全、品質、コスト、生産性等、さまざまな観点からチェックしながら、ものづくりのレベルアップを図っています。2012 年度は特に生産現場の課題に対し、研究所とタイアップして改善に取り組み大きな成果を得ました。

VOICE　未来を今日にする ZEON

取締役常務執行役員　総合開発センター長
三平能之

世の中の急激な変化を先取りした新製品開発が求められています。そのために以下のことを実行していきます。

1. 研究員自らが世界中から情報を集め、時代の変化を先取りした製品作りを進めます。
2. 製品開発の各プロセスにおいて、設計品質・生産品質をどのように設定すべきかを見える化した QFD（品質機能展開表）を作成し、的確な製品作りを進めます。
3. 製品開発の手戻りを無くすこともスピードアップには重要です。研究段階から本生産化へ円滑に移行できるように、量産化技術の構築にも力を入れて取り組みます。

これらの取り組みにより、私たちの開発した製品が必ずお客様に満足してもらえるものになると確信しています。

地域との共生活動

センター見学

発表を熱心に聞く学生たち

川崎市と連携し、近隣会社と合同で、京急線小島新田駅から殿町夜光線沿いの歩道一帯の一斉清掃・整備に川崎工場とともに参加しています。

2012 年 8 月には、新潟県立高校の総合開発センター見学を受け入れました。同校は、スーパーサイエンスハイスクール（文部科学省が科学技術や理科・数学教育を重点的に行う高校を指定する制度）に指定されており、NPO 学校サポートセンターを通じてゼオンの研究所を見学させて欲しいとの依頼を受けたのがきっかけで、来所いただくこととなりました。

当日は汗が滴るほどの猛暑の中、計 18 名の学生がセンターに訪れ、「普段見ることができない実験室、実験風景を見学できとても満足しています」といった声が多くあがっていました。

参加者に日本ゼオンを知っていただくだけでなく、化学業界に興味を持ってもらう良い機会とするためにも、今後も学生の研究所見学を受け入れていきます。

2013 年度も、インターンシップの積極的な受け入れや大学への臨時講師派遣など、大学との交流を深める活動を継続していきます。